

ルッソ兄弟、モハメド・アルダラジー（プロデューサー）インタビュー

2019年ヴェネチア国際映画祭にて

ルッソ兄弟と本作を製作することになった経緯から聞かせてください。

モハメド・アルダラジー（以下 **M**）私はバグダッド出身で、今もイラク在住で映画製作プロダクションを営んでいる。マシュー・マイケル・カーナハン監督とルッソ兄弟から連絡があり、「ザ・ニューヨーカー」誌に載った記事のことを知らされた。ジョー（・ルッソ）は記事を読んでとても感動したと言って、マシューが脚本を書くことになったと教えてくれた。マシューは非常に心を動かされて、これを絶対に映画にすべきだと確信したそうだ。それで一緒に組まないかと誘われた。完成した脚本を読んでかなり事実に近いと思っし、私はイラクのSWAT部隊のことを知っていたので、自分が表現したいことに近いと感じた。自分がこの企画に関わることで、映画をよりリアルなものにできたらと思い、引き受けることにした。撮影はマラケシュで行われたが、撮影中もずっと細かい書き込みは続いていたよ。

描かれている視点が、これまでの映画に多く見られたような、外からの視点ではないのがとても新鮮でした。

M それこそ、私が望んだことだ。これまでも似たようなテーマの企画に誘われたけれど、ずっと断ってきた。それらはすべてアメリカ側の視点で描かれていたからだ。でも、この企画は違った。イラク市民の声が書かれていたので、世界に伝えるべきだと思った。マシューはいかにISISの破壊によって市民たちが被害を受けたかを、イラク人の視点から描きたがっていた。その視点からキャラクターも作られている。ジャーセム少佐のセリフなども、非常にリアルだ。そこまで作りこむのは簡単ではなかったが、マシューは私たちイラク人のスピリットを取り込むように努力してくれた。それで文化面でのアドバイザーやセリフ監修アドバイザーなどと一緒に、可能な限り現実に近いものを作り上げていった。とてもいいチームだったと思うね。ルッソ兄弟はハリウッドで活躍しているが、これは全くハリウッド映画のように見えないだろう？ この映画はイラク人やムスリムのキャラクターをポジティブに描いている。ヒーローはアメリカの兵士だけじゃない。イラク人の中にもISISと戦う人々ももちろんいる。それがこの映画にちゃんと描かれていることが大変うれしい。ISISはイラク国内にだけいるわけではなく、世界中に散らばっている。敵がいると同時に敵は見えない。これはあまりにも複雑で困難な戦いなんだ。

ドローンによる街の映像は本物ですね。これはいつ頃撮られたのでしょうか？

M 2017年から2018年の頭頃、撮影の準備期間に撮った。一方、地上のシーンはマラケシュにセットを作った。街の雰囲気が非常に近いからね。

《アンソニー・ルッソ（以下 **A**）と弟のジョー・ルッソ（以下 **J**）に》あなた方にとって、本作の製作のきっかけはどのようなものだったのでしょうか？

J プロデューサーのスティーヴン・マクフィーリーは僕らの長いコラボレーターで、『アベンジャーズ』と一緒にやっていた。彼からこのストーリーのことを聞いて、これは語るべきことだ、ぜひ一緒に映画化しようということになった。

あなた方がこれまで製作されてきた作品とは、随分毛色が違いますね。

J だからこそやろうと思った。ストーリーの素晴らしさに心を打たれたんだ。政治的な文脈があり、若者が育っていく要素もある。それに、伝統的なハリウッド映画とは異なる視点で描かれているのが新鮮だった。これまで語られることのなかったヒーローたちを、ポジティブな描き方で語るのは素晴らしいと思っただね。

A 自分たちにとっては、これまでと全く異なるというよりは、むしろ延長だね。マーベル・シリーズで僕たちがやってきたことの一つは、世界中の観客と密接につながることで、だから本作のようなパワフルなストーリーを語ることで、観客にまた違った刺激を与えられる。そういう意味で延長とも言えるね。

普段あなた方が作っているマーベル作品を観る若い観客にも観てもらうことを意識しましたか？

J それは意図していた。普段僕らの映画を観ているような観客に、このストーリーを知ってもらいたかった。この映画には観る者がとても集中するような緊張感がある。

A 彼らはこれを見て、目が釘付けになるんじゃないかな。それだけの効果がある作品だと思うね。

イラク側のアルダラジーさんとはどのようなコラボレー

ションでしたか？

A ジョーと僕は監督として働く時と、プロデューサーとして働く時の役割は異なるものと自覚している。プロデューサーの仕事は、現場の人々が働きやすいように常にサポートすることだ。モハメドはすごく詳細にいろいろな要素をチェックし、リアリティを持たせてくれた。僕らとしてはただそれをできる限りサポートしたかった。十分な素材を供給したり、情熱を共有して、素晴らしいコラボレーターたちを集めたりした。映画を作る上で、様々な面でパワーを注入するように心掛けた。

カーナハン監督の仕事ぶりについてはどのような印象を持ちましたか？

J 彼は素晴らしい監督だ。とても知的で、政治的な意識が高く、対話に関してオープンな姿勢を持っている。この物語を語りたいたいという彼の情熱には、並々ならぬものがあった。この話をなるべく多くの人に知って欲しい、そういう想いで作っていたと思うね。

お二人はプロデューサーとしても監督としても、これまで多くの娯楽作を作られてきましたが、この映画はあなた方にとってどんな位置にあると思いますか？

A これまで20年以上のキャリアを築いてきた。そんな中で、今だからこそ、こういう映画を作ることができた、そういう作品だと思う。映画はビジネスでもあり、こういう映画を作るには、ある程度の資金を必要とするわけだが、それは簡単ではない。と言うのも、この手の作品は特別アメリカの観客に向けられているわけではない。でも僕らは、こういう作品を製作できる恵まれたポジションにいる。本作が特にターニングポイントとは思わないけれど、普段スタジオで作られないような映画をやりたいと思った。今、こういうポリティカルな映画を作るべきだという信念があった。純粋に僕らがやりたいと思ったことの反映だ。

J 誰も観客がどう反応するかは予想がつかない。監督として、製作者として我々ができることは、これは作るに値する物語だと信じながら、パッションを持って映画を作ること。この映画はまさにそういうタイプで、実際に完成することができて誇りに思う。観客にどう受け入れられるかはわからないが、とにかく作ることに情熱を持っていた。

このプロジェクトの最も大きなチャレンジは何でしたか？

M ジャーセム少佐の爆発のシーンが最も大変だった。それと撮影に適した場所を見つけることだね。でも、この映画の製作チームは素晴らしかった。

ハリウッドの娯楽映画のような雰囲気にならないことに気を配ったのでしょうか？

J それが僕らにとってはチャレンジだった。そしてそういう映画を作る場合は、良いコラボレーターが必要だ。実際、これまで見たこともないような映画を作る上で、スタッフの誰もが素晴らしい貢献をしてくれたと思うよ。

アンソニー&ジョー・ルッソ（プロデューサー）

過去10数年の間にくつもの大ヒット映画と一緒に監督し、プロデュースしてきた兄弟。マーベル・シネマティック・ユニバース(MCU)の『キャプテン・アメリカ／ウィンター・ソルジャー』(14)、『シビル・ウォー／キャプテン・アメリカ』(16)、『アベンジャーズ／インフィニティ・ウォー』(18)、『アベンジャーズ／エンドゲーム』(19)などが代表作。世界の興行成績は、合わせて67億ドルにも上る。TVシリーズ「ブルヘス一家は大暴走!」(03〜05)でエミー賞を受賞する。2018年、スタジオAGBOを設立。ロサンゼルスを中心に本部を構え、才能あるアーティストを育て、一流のチームを養い、品格のある作品の創作を目指している。

モハメド・アルダラジー（エグゼクティブ・プロデューサー）

ロンドンで映像制作を学んだ後、故郷のイラクに戻り、作家、製作者、監督、撮影監督として活躍。『夢』(06)で長編映画監督デビューし、ブルックリンを始めとする国際映画祭で賞を受賞する。ドキュメンタリー映画『War, Love, God & Madness(原題)』(08)はトライベッカ映画祭で審査員賞にノミネートされる。続く『バビロンの陽光』(09)はベルリン国際映画祭の二つの賞を始め数々の賞を受賞し、サンダンス映画祭の審査員大賞にノミネートされる。その後、監督した作品には、ドキュメンタリー映画『In My Mother's Arms(原題)』(11)、『The Journey(原題)』(17)などがある。